

## 【研究論文】

# 保育の質の構造と保育者の心理的特性との関連に関する検討（1） ～保育・幼児教育施設の形態の違いにおける保育者の心理的特性の違い～

小原倫子\* 渡部努\*\* 山下晋\*\* 米窪洋介\*\* 町田由徳\*\*\*

## 要 旨

子どもの発達に影響を及ぼすことが考えられる保育の質について、近年、国際的に多様な学術領域において検証され、多くの示唆が得られている（秋田・佐川,2011）。しかしながら、保育者を対象とした保育の質の認識に関する検討は十分になされているとはいえない。淀川他（2017）は「保育の質」に関する保育者の認識に着目し、役職の違いにより認識の構造が異なることを報告している。本研究の全体的な枠組みは、保育者が認識する「保育の質の構造」と保育者の心理的特性との関連に着目し、保育者が認識する「保育の質の構造」が保育の両義的な側面である相互独立・相互協調的自己観や自分が果たすべき役割をどの程度受容しているかに焦点を当てた役割受容とどのように関連するのかについて、検討することである。今回の論文では「保育の質の構造と保育者の心理的特性との関連に関する検討（1）～保育・幼児教育施設の形態の違いにおける保育者の心理的特性の違い～」として、施設の形態の違いにおける保育者の心理的特性の違いについて比較検討した。

キーワード：保育者の心理特性、保育・幼児教育施設の形態、保育者の年齢、保育者のキャリア

## I. 問題・目的

### 保育の質に対する近年の研究動向と本研究の目的

保育の質に関しては、近年国際的に多様な学術領域において検証され、多くの示唆が得られている。

OECD（2006）の報告書では、乳幼児期の保育・教育は、「子どものよりよい福祉」や「生涯学習」の基盤となることが繰り返し述べられており、乳幼児期の保育・教育の重要性は、保育・教育領域にとどまらず、将来的な人生の成功までも左右することが示されている（James,2017）。

更に、乳幼児期の保育・教育が「子どものよりよい福祉」や「生涯学習」の基盤となり、将来的な人生の成功に寄与するためには、その質の向上が課題であることが示唆されている OECD（2012）。

保育の質に関して、Lavers（2003）は、EXE-theoryの中で、プロセスに焦点を当てた方法について述べている。時間的な流れの中で子どもの情緒的な安心感と子どもがどれだけ活動に夢中になり没頭しているかの二つの視点で保育の質を捉えることの意義について述べている。

一方、淀川他（2017）は、「質の良い保育」に関する保育者の認識に着目し、役職の違いにより認識の構造が異なることを報告している。園長、主任ともに「環境づくり」という環境への言及が多く見られ、園長のみでは「子どもの身体的な発達を支援すること」や「基本的な生活習慣に関すること」が多く、主任のみでは「子ども一人ひとりを大切にすること」や「保育者と子どもとの受容的な関わり」などが多く言及されていると述べている。

また、淀川他（2017）との一連の研究で、野澤他（2017）は、1歳児、3歳児、5歳児クラス担任が考える「質の良い保育」について報告している。1歳児クラス担任が考える「質の良い保育」の1位は「保育環境への配慮」であり、3歳児、5歳児クラス担任が考える「質の良い保育」の1位は「主体性・自発性の尊重・育成」であった。野澤他（2017）は、全年齢において、「質の良い保育」とはという問いに、「環境」「主体性」などが多く言及されていたことから、保育実践者は「保育の質」をある程度共通の枠組みにより認識していることを示唆している。

日本子ども学会（2009）による保育の質と子ども

\*岡崎女子大学子ども教育学部

\*\*岡崎女子短期大学幼児教育学科

\*\*\*岡崎女子短期大学現代ビジネス学科

の発達に関する長期追跡研究の報告によると、子どもの発達を促進する質の良い保育とは、保育の構造と保育のプロセスの2要因であることが示されている。保育の構造とは、子どもと保育者の人数の比率や保育者の教育レベルであり、保育のプロセスとは保育場面の中で実際に行われる保育者による子どもへの関わり方などが挙げられている。

以上のように、保育の質に関して、定義や評価、子どもの発達に及ぼす影響など、様々な視点から調査研究がすすめられ、その重要性について注目が高まっている。しかしながら、保育を行う当事者である保育者が質の良い保育をどのように認識しているのか、またそれらの認識の違いに影響を及ぼすことが推測される保育者の心理的特性について十分な検証はされていない。

そこで本研究の全体的な枠組みとして、保育者が認識する「保育の質の構造」と保育者の心理的特性との関連に着目し、保育者が認識する「保育の質の構造」が保育の両義的な側面である相互独立・相互協調的自己観や、自分が果たすべき役割をどの程度受容しているかに焦点を当てた役割受容とどのように関連するのかについて、検討することを目的としている。

その中で、今回の研究では、「保育の質の構造と保育者の心理的特性との関連に関する検討(1)～保育・幼児教育施設の形態の違いにおける保育者の心理的特性の違い～」として、施設の形態の違いにおける保育者の心理的特性の違いについて比較検討した。心理的特性の指標とした相互独立・相互協調的自己観とは、相互独立的自己観と相互協調的自己観という2つの区分から自己観の個人差を測定する尺度である。Markas & Kitayama(1991)は、「相互独立的自己観 (independent construal of the self)」は、欧米の文化圏に多く見られる考え方で、自己は他者から独立した存在であると考えられ、自律的であることや独自の特性を見つけ表現することが重要とされ、自己の定義において他者は重要な意味を持たず、自己は他者なしでも完全な存在であるという認識を述べている。一方「相互協調的自己観 (interdependent construal of the self)」は、日本を含むアジア文化圏に多く見られる考え方で、人と人の関係性を重視し、他者と強固な関係を維持することが大切であり、特定の文脈による他者との関係が自己を定義し、自己は適切な社会関係の中で意味を持つという認識を述べている。自己を他者との関係性でどう捉えるの

かという自己表象は、相対的に優勢なものが活性化され、活性化された自己表象が個人の行動を決定するというモデルが報告されている(木内,1995)。それ故、保育者が自らの自己観について「相互独立的自己観 (independent construal of the self)」と「相互協調的自己観 (interdependent construal of the self)」のどちらが優位であるかは、保育者の保育の質の認識や保育の実践そのものにも影響を及ぼすことが推測される。

また、もうひとつの心理特性の指標である役割受容とは、Super (1980) の「ライフキャリア・レイナー」理論を背景とし、人が自らの人生における役割にどの程度満足し、それらを評価しているか、また、それらの役割をどの程度達成し、有能感を得ているかを測定する尺度である(三川,1990)。項目内用は一定の抽象度を持っており、保育者自らの役割に対する満足や評価、達成の程度や有能感の測定にも活用できるものと考えられる。また、自らの人生における役割に対する受容度は、日常生活やメンタルヘルスとの関連があることが予測される。それ故、保育者による自らの役割受容度の認識は、保育の質の認識や保育の実践そのものにも影響を及ぼすことが推測される。

以上のことから、本研究では保育・幼児教育施設の形態の違いにおける保育者の相互独立・相互協調的自己観と役割受容という、2つの心理的特性の違いについて比較検討した。調査の実施にあたり、保育者の心理的特性が異なることが推測される、健全な子どもたちが多く通う公立保育園と発達に心配のある子どもが通う公立子ども発達センターを対象とした。

## II. 方法

### 【対象者】

O市公立保育園36園に勤務する保育士350名、O市公立こども園3園に勤務する保育士21名、O市私立幼稚園26園に勤務する幼稚園教諭260名、O市こども発達センターに勤務する保育士44名 計675名を対象とした。O市こども発達センターは、発達に心配のある子どもが、早期に必要な相談・医療・支援が受けられる施設である。

### 【調査内容】

675名を対象に、「保育プロセスの質」評価スケール(Iram Siraj et al.,2016)に基づき作成した、保育の質の認識に関して自由記述による質問紙調査を実施した。また、保育者の心理的特性に関しては、木内(1995)による16項目の「相互独立・相互協調的自己観」尺度と、三川(1990)による27項目の「役割受容」尺度による質問紙調査を実施した。「相互独立・相互協調的自己観」尺度の回答は4件法で、採点は、採点は各項目の得点を単純加算した値を尺度得点とするため、得点が高いほど相互協調的自己観が強いことを示す。「役割受容」尺度は「役割満足」、「役割評価」、「役割有能感」、「役割達成」の4つの下位尺度で構成されている。回答は5件法で、採点は各下位尺度を単純加算した値を尺度得点とするため、得点が高いほど、「役割満足」、「役割評価」、「役割有能感」、「役割達成」が高いことを示す。質問紙は園単位で送付し、個別回答の上、園単位で返送を依頼した。

### 【調査時期】

平成30年9月～10月

### 【分析項目】

今回の紀要では、質問紙が回収済であるO市公立保育園に勤務する保育士117名と、O市子ども発達センターに勤務する保育士37名計154名を分析対象とし、保育の質の構造と保育者の心理的特性との関連に関する検討(1)として、保育・幼児教育施設の形態の違いにおける保育者の心理的特性の違いについて検証した。心理的特性に影響を及ぼす要因として、年齢と保育士としてのキャリアの年数及び、最終学歴、取得資格、役職についても検証を行った。

## Ⅲ. 結果

O市公立保育園とO市子ども発達センターに勤務する保育者の年齢と保育者としてのキャリアの年数に有意な差は認められなかった。また、最終学歴に関してはO市公立保育園に勤務する保育者に比べ、O市子ども発達センターに勤務する保育者は最終学歴が大学である割合が高く、大学院が最終学歴の保育者も認められた。取得資格に関しては、O市子ども発達センターに勤務する保育者に比べO市公立保育園に勤務する保育者は、保育士資格と幼稚園教諭免許の両方を取得し

ている割合が高かった。役職に関しては、O市公立保育園に勤務する保育者の8割が担任又は副担任であることに比べ、O市子ども発達センターに勤務する保育者の4割は、フリー又は補助の仕事に就いていた。

保育者の相互独立・相互協調的自己観と役割受容の得点を対応なしの1元配置分散分析で比較した結果、相互独立・相互協調的自己観に有意な差は認められなかった。役割受容の下位尺度の1つである「役割評価」の結果が $F(1,152)=3.51, p=.063$ となり、有意傾向であった。発達センターに勤務する保育者は保育園に勤務する保育者よりも役割評価得点が有意に高い傾向にあった。

Table1 分析対象者の年齢と保育士としてのキャリアの年数

	人数	年齢 M (SD)	キャリア M (SD)
O市公立保育園保育者	(n=117)	35.29 (11.31)	11.43 (8.95)
O市子ども発達センター保育者	(n=37)	37.97 (11.83)	11.19 (9.56)

公立保育園に勤務する保育士117名と、O市子ども発達センターに勤務する保育士37名の年齢と保育士としてのキャリアの年数の平均値に有意な差は認められなかった。

Figure1 O市子ども発達センター保育者の最終学歴

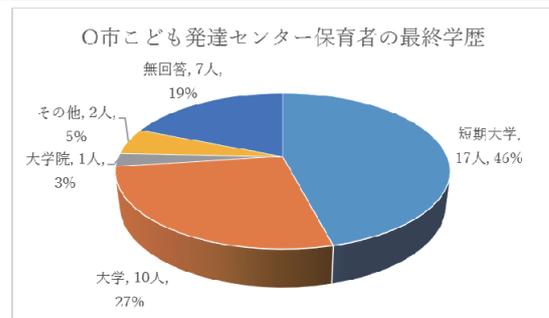
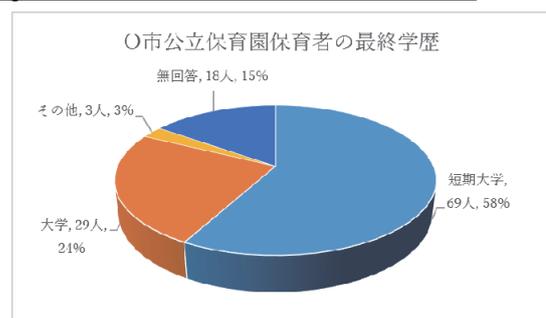


Figure2 O市公立保育園保育者の最終学歴



〇市公立保育園に勤務する保育者に比べ、〇市子ども発達センターに勤務する保育者は最終学歴が大学である割合が高く、大学院が最終学歴の保育者も認められた。

Figure3 〇市子ども発達センター保育者の取得資格

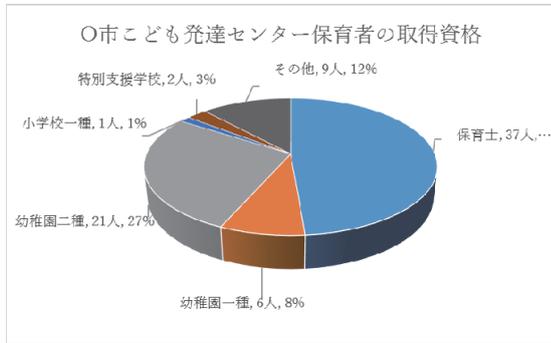
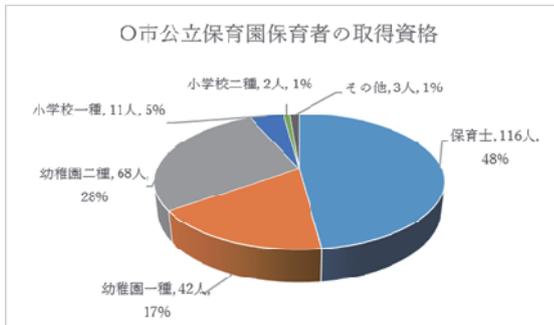


Figure4 〇市公立保育園保育者の取得資格



〇市子ども発達センターに勤務する保育者に比べ〇市公立保育園に勤務する保育者は、保育士資格と幼稚園免許の両方を取得している割合が高かった。

一方〇市子ども発達センターに勤務する保育者は〇市公立保育園に勤務する保育者に比べ、保育士資格と併せて、その他の資格を取得している割合が高く、その内容は、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、児童発達支援管理責任者等、多岐にわたっており、より専門的な資格を取得していることが示された。

Figure5 〇市子ども発達センター保育者の役職

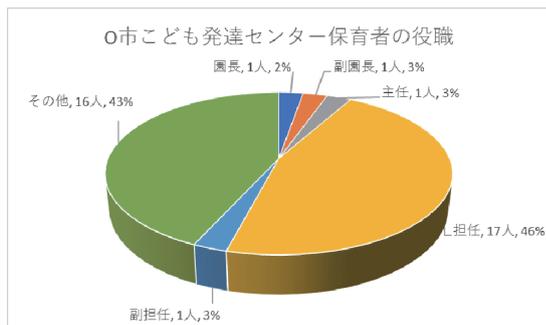
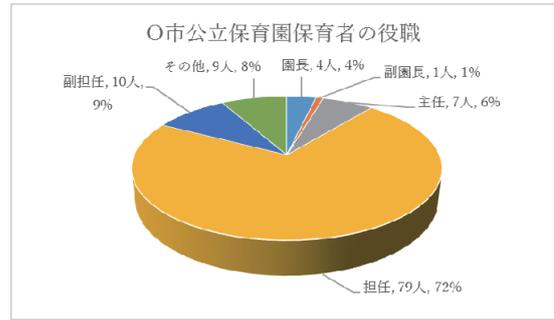


Figure6 〇市公立保育園保育者の役職



〇市公立保育園に勤務する保育者の8割が担任又は副担任であることに比べ、〇市子ども発達センターに勤務する保育者の4割は、フリー又は補助の仕事についていた。

Table 2 相互独立・相互協調的自己観基礎統計量

	平均値	標準偏差
〇市公立保育園保育者	46.57	6.63
〇市子ども発達センター保育者	48.07	6.00

Table 3 役割受容（役割評価）基礎統計量

Source	SS	df	MS	F	p
クラス	102.441	1	102.441	3.514	.063*
誤差	4431.533	152	29.155		
全体	4533.974	153			

Table4 保育者の役割受容（役割評価）の分散分析結果

	平均値	標準偏差
〇市公立保育園保育者	24.98	5.30
〇市子ども発達センター保育者	26.89	5.71

保育者の相互独立・相互協調的自己観と役割受容の得点を対応なしの一元配置分散分析で比較した。結果は相互独立・相互協調的自己観に有意な差は認められなかった。役割受容の下位尺度の1つである「役割評価」の結果が  $F(1, 152)=3.51, p=.063$  となり、有意傾向であった。発達センターに勤務する保育者は保育園に勤務する保育者よりも役割評価得点が有意に高い傾向にあった。

## VI. 考察及び今後の課題

本研究では、保育・幼児教育施設の形態の違いにおける保育者の相互独立・相互協調的自己観と役割受容という、2つの心理的特性の違いについて、保育者の心理的特性が異なることが推測される、健常な子どもたちが多く通う公立保育園に勤務する保育者と、発達に心配のある子どもが通う公立こども発達センターに勤務する保育者を対象として比較検討した。

第一に、心理的特性に影響を及ぼす要因として、年齢と保育士としてのキャリアの年数及び、最終学歴、取得資格、役職について比較検討し、第二に、相互独立・相互協調的自己観と役割受容という、2つの心理的特性の違いについて比較を行った。

以下に各目的に対応した結果について考察を行い、最後に今後の課題を述べる。

### (1) 年齢と保育士としてのキャリアの年数及び、最終学歴、取得資格、役職についての比較

公立保育園に勤務する保育士 117 名と、0 市こども発達センターに勤務する保育士 37 名の年齢と保育士としてのキャリアの年数の平均値に有意な差は認められなかった。最終学歴に関しては 0 市公立保育園に勤務する保育者に比べ、0 市こども発達センターに勤務する保育者は最終学歴が大学である割合が高く、大学院が最終学歴の保育者も認められた。取得資格に関しては、0 市こども発達センターに勤務する保育者に比べ 0 市公立保育園に勤務する保育者は、保育士資格と幼稚園免許の両方を取得している割合が高かった。一方 0 市こども発達センターに勤務する保育者は 0 市公立保育園に勤務する保育者に比べ、保育士資格と併せて、その他の資格を取得している割合が高く、その内容は、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、児童発達支援管理責任者等、多岐にわたっていた。最終学歴及び取得資格の結果から、健常な子どもたちが多く通う公立保育園の保育者と比較すると、発達に心配のある子どもが通う公立こども発達センターの保育者は、子どもの発達特徴に関わるための専門性を有していることが推測される。役職に関しては、0 市公立保育園に勤務する保育者の 8 割が担任又は副担任であることに比べ、0 市こども発達センターに勤務する保育者の 4 割は、フリー又は補助の仕事に就いていた。発

達に心配のある子どもが通う施設形態では、担任のみでは対応が難しく、フリーや補助という立場で担任をサポートする役割がより必要とされることが考えられる。

### (2) 保育者の相互独立・相互協調的自己観と役割受容についての比較

公立保育園に勤務する保育士 117 名と、0 市こども発達センターに勤務する保育士 37 名の保育者の相互独立・相互協調的自己観に有意な差は認められなかった。役割受容の下位尺度の 1 つである「役割評価」の結果が  $F(1, 152)=3.51, p=.063$  となり、有意傾向であった。発達センターに勤務する保育者は保育園に勤務する保育者よりも役割評価得点が有意に高い傾向にあった。

第一と第二の考察を総合すると、発達に心配のある子どもが通う公立こども発達センターの保育者は、子どもの発達特徴に関わるための専門性を有していることから、自らの保育者としての役割をより高く評価する傾向にあることが示唆されたものと思われる。

### 今後の課題

今回の研究では、保育・幼児教育施設の形態の違いにおいて、相互独立・相互協調的自己観に有意な差は認められなかった。しかしながら、どちらの施設の保育者の尺度得点の平均値も、木内(1995)により報告されている、社会人を対象とした尺度得点の平均値よりも高く、相互協調的自己観が強いことが示されている。今後は本研究の全体的な枠組みである、保育の質の構造と保育者の心理的特性との関連について、保育・幼児教育施設の形態別に検証することで、それぞれの施設に勤務する保育者の専門性が明らかになる可能性が考えられる。この点は、興味深い検討課題である。その際、今回の研究では尺度による質問紙調査の量的な分析のみを使用したが、保育の質の認識に関する自由記述の質的な分析データを用いて更なる検討を重ねることが必要であろう。

### 付記

小原：第 I 章、第 II 章、第 III 章、第 IV 章 執筆

渡部：第 I 章、第 II 章、第 III 章、第 IV 章 論文の  
草稿執筆や重要な専門的内容について重要な校閲を行っている

山下：第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章 論文の  
草稿執筆や重要な専門的内容について  
重要な校閲を行っている  
米窪：第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章 論文の  
草稿執筆や重要な専門的内容について  
重要な校閲を行っている  
町田：第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章 論文の  
草稿執筆や重要な専門的内容について  
重要な校閲を行っている

## 注

- (1) 本研究は、私立大学研究ブランディング事業の助成を受けて実施されたものである。
- (2) 本研究は、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会による研究倫理審査において、承認を受け、実施されたものである。  
通知番号 (17)

## 引用文献

- 1) 秋田喜代美・佐川早季子(2011). 保育の質に関する縦断研究の展望 東京大学大学院教育学研究科紀要, 51, 217-234.
- 2) Heckman James, J. (2015). 幼児教育の経済学(古草 秀子, 訳). 東京：東洋経済新報社.
- 3) 木内亜紀(1996). 独立・相互依存的自己理解—文化的影響, およびパーソナリティ特性との関連—心理学研究, 67, 308-313.
- 4) Lavers, F& Heylen, L. (2003). Involvement of Children and Teacher Style. Leuven University Press. 13-24.
- 5) Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. Psychological Review, 98, 224-253.
- 6) 三川俊樹(1990). ライフ・キャリアの視点からみた役割受容 進路指導研究, 11, 10-17.
- 7) 日本子ども学会(2009). 保育の質と子どもの発達 アメリカ国立小児保健・人間発達研究所の長期追跡研究から。東京：赤ちゃん和妈妈社.
- 8) 野澤祥子・淀川裕美・高橋翠・遠藤利彦(2017). 園長・主任が考える「質の良い保育」とは—全国の保育・幼児教育施設大規模調査から②—日本保育学会第70回大会発表論文集, 457.
- 9) OECD. “Starting Strong II : Early Childhood Education and Care” OECD, 2006.
- 10) OECD. “Starting Strong III : A Quality Toolbox for Early Childhood Education and Care” OECD, 2012.
- 11) Siraj, I, & Kingston, D, & Melhuish, E. (2016). 「保育プロセスの質」評価スケール. (秋田喜代美・淀川裕美, 訳). 東京：明石書店.
- 12) Super, D. E. (1980). A life-span, life-space approach to career development. Journal of Vocational Behavior, 16, 282-298.
- 13) 淀川裕美・野澤祥子・高橋翠・遠藤利彦・秋田喜代美(2017). 園長・主任が考える「質の良い保育」とは—全国の保育・幼児教育施設大規模調査から①—日本保育学会第70回大会発表論文集, 456.

## 謝辞

本研究を実施するにあたり、ご協力いただきました岡崎市福祉事業団、岡崎市保育課の皆様、調査にご協力いただきました岡崎市公立保育園、岡崎市こども発達センターのスタッフの皆様、データ入力をしてくれた岡崎女子短期大学現代ビジネス学科の学生の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。